

131.

616.61-006

「腎臓カルブUNKEL」ニ就テ

岡山醫科大學津田外科教室（主任津田教授）

醫學士 安原元藏

[昭和 12 年 7 月 6 日受稿]

*Aus der Chirurgischen Klinik der Medizinischen Fakultät Okayama.**(Vorstand: Prof. Dr. Seiji Tsuda)*

Über Nierenkarbunkel.

Von

Dr. Motozo Yasuhara.

Eingegangen am 6. Juli 1937.

Es handelte sich um einen 22 jährigen Mann, der im Anschluss an eine Osteomyelitis der linken Fibula, unter hohem Fieber und Leukocytose an rechtseitigem, spontanem und druckempfindlichem Nierentumor erkrankt war. Im Harn fanden sich Eiweiss und weisse Blutzellen nur in geringer Menge.

Da die subjectiven Beschwerden heftig waren, wurden Cystoskopie und Funktionsprüfung der Niere nicht weiter ausgeführt.

Nach der klinischen Untersuchung lautete die Diagnose auf rechte Paranephritis.

Aber bei der operativen Freilegung der Niere zeigte sich eine entzündete Verwachsung in der Hilusgegend, und am unteren Pol im Parenchym fanden sich mehrere Abscessherde.

Im Eiter wurden gelbe Staphylococcus nachgewiesen. Als Therapie ist in solchen Fällen meist Nephrektomie empfehlenswert, aber in diesem Fall hatte ich guten Erfolg mit einer chirurgisch möglichst konservativen Behandlung, nämlich „Nephrotomie“.

(Autoreferat)

目 次

- 第1章 緒 言
 第2章 症 例
 第3章 發生原因
 第4章 症狀並ニ診断
 第5章 豫後並ニ治療
 第6章 總 括
 主要文献

第1章 緒 言

「腎臟カルブンケル」トハ臨牀の名稱トシテ奇異ノ感アレド全ク轉移性腎膿瘍ノ1異型ニ過ギズ、其ノ特異ナル臨牀の所見ヨリ獨立の疾患トシテ取扱ハレ、化膿竈ガ恰モ皮膚ニ於ケル癰ニ彷彿タルガ故ニ、1891年 J. Israel 氏始メテ之ヲ報告シ斯克命名セルモノナリ。爾來 Barth, Jordan, Colmers, Ekehorn, Smirnow, Horn, Lazarus, Nicolich, Kretschmer, Lipschutz 等相次デ本症ヲ報告シ、Voss, Prives, Brady 等ハ統計的ニ檢索セリ。其ノ他外國文献ニハ既ニ多數ノ記載アレド、本邦ニ於ケル報告ハ昭和7年(1932年)菊地氏ニ始マリ次デ塚家、金子、神部、井上、北川氏等ノ報告アリ。然レドモ未ダ僅カ數例ヲ算スルノミニシテ寥寥タルモノナリ。余ハ最近腎臟周圍炎ノ疑ノ下ニ試驗的腎臟露出術ヲ行ヒシニ本疾患ノ1例ヲ經驗セルヲ以テ茲ニ追加例トシテ報告スルモノナリ。

第2章 症 例

患者 藤○政○ 男子 22歳 農
 入院 昭和9年7月13日
 退院(全治) 同年8月18日
 家族歴 特記スベキ事無ク何等遺傳的疾患ナシ。

既往歴 患者ハ正規分娩兒ニシテ、種痘善感、麻疹不明、生來健康、著患ヲ知ラズ、花柳病モ強ク否定セリ。

現病歴 6月初旬左拇趾ノ疣贅ヲ切除セル後、創傷化膿ヲ來シ其ノ治療中6月25日ニ到リ、左下腿部ノ筋炎ヲ併發シ、醫師ニヨリ切開ヲ受ケ治療中7月9日ニ到リ、1度平常ニ復セシ體温ガ惡寒戰慄ト共ニ上昇シ39°以上ニモ達シ、同時ニ右側腹部ヨリ腰部ニ及ブ疼痛ヲ訴ヘ、爾來發熱疼痛ハ依然去ラズ7月13日當津田外科ヲ訪レタリ。

現症 體格中等大、榮養中等度、皮膚正常ニシテ顔貌憔悴セズ、瞳孔、結膜、舌ニ異常ヲ認メズ、脈膊整調ナルモ稍頻數小ニシテ緊張稍弱ナリ。體温 38.8°C、食慾睡眠共ニ障碍サル。淋巴腺腫脹無ク心臟肺臟ニ何等病的所見無シ。

尿 黃褐色、反應酸性微カニ混濁アリ。比重1020 蛋白ハ陽性ナレド、糖其ノ他無シ。鏡檢スルニ僅小ノ白血球ヲ認ムルノミ。

糞便 蟲卵潛血無シ。

血液像 血型ハA型、赤血球390萬、白血球12,500、血色素70、血球沈降速度ハ稍促進セリ。

局所所見 左拇趾ノ創傷ハ既ニ全治セリ。左下腿ノ前内面ニ肉芽創アリ、中央ニ囊孔ヲ作り僅ニ膿汁排泄アリ、消息子約4cc入ル。肉芽ノ色ハ不良ナリ。腹部ハ全ク扁平ニシテ右季肋下部ヨリ臍ノ高サニ於テ腫瘍ヲ觸知シ、其ノ境界ハ全ク不鮮明ナリ。之ヲ腹部及ビ腰部ヨリ兩手デ握ムナラバ壓痛アリ、波動感ハ證明セラレズ、腰部ニ浮腫性腫脹無シ。其ノ他マツクバーネー氏點ニ壓痛アリ。下肢ハ屈曲位ヲ取ラズ正常位ナリ。

診斷 右腎臟周圍炎ノ疑、自覺症狀増セシ爲更ニ膀胱鏡検査、腎機能検査ハ行ハズ。

手術 昭和9年7月16日

手術所見 術前30分「モルフィンアトロピン」0.7cc前注射後、0.5%「ヌベルカイン」2cc腰部麻

醉ニテ局所消毒ニハグロツシツヒ氏法ヲ施セリ。
先ヅ右側腰部ノ最後ノ肋骨ノ高サヨリ外下方ニ向
ヒ弓状切開ニテ皮膚、筋肉ヲ開キ脂肪被膜ヲ破リ
右腎ニ達セリ。腎臓ハ稍腫脹シ硬ク觸レ暗赤色ヲ
呈セリ。腎臓周圍ヲ探索スルニ腎臓周圍膿瘍ヲ見
ズ腎門ニテ炎症性癒着アリ。腎臓ヲ數回試験穿刺
スルニ血液ノミ出デ胆汁ヲ證明セズ、唯下極ノ近
クニテ膿栓ヲ1回吸引セリ、尙ホ下極ノ近クヲ詳
細ニ檢スルニ小膿瘍集團ヲナセル病竈部アリ、帶
黃色ヲ呈セリ。此部ニ淺キ切開ヲ行ヒ、腎臓ノ周
圍ニハ「ヨードフォルムガーゼタンポン」ヲナシ
「葡萄狀球菌アンチグイールス」ヲ注入シ筋肉皮膚
ノ部分的縫合ニテ手術ヲ終レリ。胆汁ハ塗抹標本、
純培養共ニ黃色葡萄狀球菌ナルヲ確メ得タリ。

手術後診斷 「腎臓カルブンケル」

手術後經過 概ネ順調ナレド 37°—38°C ノ發熱
アリ、尙ホ下脛ノ瘻孔治癒セザレバ試ミニ下脛ノ
「レ線」撮影ヲ行フニ、腓骨ニ腐骨片ヲ認メ骨髓炎
タリシ事ヲ確認セリ。然レ共術後 16 日目ニハ全ク
平熱ニ復シ全身状態良好トナリ、局所モ單ナル創
傷療法、「アンチグイールス」注入、「ゾラックス」
照射ノ併用ニヨリ、術後 1 箇月目ニ全治退院セリ。

第 3 章 發生原因

本疾患ハ身體他部ノ化膿竈ヨリ血行ヲ介シテ轉
移性ニ起ルモノニシテ、Prives ノ調査ニヨレバ皮
膚ノ癰、癰ニ原因セルモノ最モ多シセラレ文獻
ニハ其ノ他癰疽、蜂窩織炎、皮下膿瘍、筋炎、乳
腺炎、瘻瘡、骨髓炎、骨膜炎、喇叭管炎、化膿性
攝護腺炎、耳下腺炎等ヨリ轉移セルモノ報告セラ
ル。又急性傳染病タル猩紅熱、「チフス」、「イン
フルエンザ」、肺炎等ニ續發セリト唱フル者アリ。
又原因ト思惟スベキ疾患ナクシテ發生セル場合ア
リト云ハル。Brady ハ 1932 年鼻加答兒ヨリ發生
セル「腎臓カルブンケル」ヲ報告シ極メテ罕ナルト

共ニ興味アルモノトナセリ。Smirnow ハ侵入門
戸不明ナル場合ハ、呼吸器疾患ガ多大ノ關係アル
ヲ力説シ先ヅ氣道粘膜炎ニ疑ヲオクベシト云フ。本
症ノ誘因ニ關シテハ尙ホ明カナラザルモ Israel,
Prives, Lichtenstern ハ外傷ニ重キヲオキ、又
Prives, Smirnow ハ腎下垂アリトナシ、Horn ハ
攝護腺肥大ノ爲、Brady ハ尿道狹窄ノ爲ニ起ル尿
停滯ガ誘因ナリト唱へ、又腎臓ニ入ル動脈ノ畸形
ガ誘因ナリト云フ者アリ。病原菌トシテハ Prives
ノ統計ニモ示ス如ク、殆ド常ニ葡萄狀球菌ガ證明
セラレタリ。然レドモ其ノ病原性ニ關シテ研究セ
ル者ハ尠ク、Colmers, Smirnow, Barth, Lazarus
等アルノミニシテ尙ホ興味アル問題ガ殘サレタリ
Prives ノ統計ニヨレバ 28 例ニ於テ次ノ病原菌ヲ
擧ゲタリ。

黃色葡萄狀球菌	13 例
種々ノ葡萄狀球菌	12 例
溶血性葡萄狀球菌	1 例
双球菌	1 例
大腸菌	1 例

本邦ノ報告例ニヨレバ、原因疾患トシテ擧ゲラ
ルモノハ喇叭管炎(菊地氏)、癰(大塚氏)、瘻瘡
(金子氏)、癰疽(神部氏)、骨髓炎(井上氏)、瘻瘡
(北川氏)ニシテ總テ黃色葡萄狀球菌ノミ證明セラ
レタリ。余ノ例ニ於テハ左拇趾ノ疣贅ヲ切除後化
膿ヲ來シ、次デ下脛部ノ筋炎ヲ併發シ、之ヨリ起
始セルモノト云ヘルモ、入院後左腓骨骨髓炎アル
ヲ診斷シ得タレバコレガ原發竈ナリト思フ。而シ
テ余ノ例モ亦黃色葡萄狀球菌ナリキ。

第 4 章 症狀並ニ診斷

本症ハ第一次疾患ト同時ニ發生スル事ハ稀ニシ
テ、相當ノ時日ヲオイト後發生スルモノトサレ、
其ノ潜伏期ニ就テハ學者ニヨリ非常ニ相違アリテ

全ク不定ナリ。症状トシテハ先ヅ發熱、惡寒、食慾不振、全身疲勞感等病的全身障礙ト、ソレニ續イテ或ハ前後シテ表ハレル腎臟部ノ疼痛ナリ。普通惡寒戰慄ヲ以テ卒然體溫上昇シ38°乃至40°Cニ達シ、弛張性若クハ稽留性ニ續キ「テブス」其ノ他内科の疾患ト誤ラルル事アリ。然レ共發熱ハ何時迄モ繼續スルニ非ズシテ、高低不定ニシテ時ニハ病症ハ反ツテ進行セルニ不拘平熱ニ經過スル場合アリ。菊地氏ノ例ハ僅カ2回ノ熱發作アリタルノミデ忽チ平熱ニ經過シ、大塚氏ノ例ハ發熱一定セズ時ニ無熱ノ状態ヲ保テル事アリ、金子氏ノ例ハ始メハ弛張性ニ經過シ後無熱トナレリ。余ノ例ニテハ原發竈治癒セザリシ爲カ高熱弛張シ手術後2週間ニシテ始メテ無熱ノ状態トナリタリ。要スルニ定型的ノ熱型ハ來サザルモノノ如シ。續イテ起ルハ腎臟ノ壓迫感。緊張感乃至疼痛若クハ壓痛ニシテ、通常ハ他ノ所見ニ遲レテ出現スト稱セラルモ、時ニ通常ノモノト反對ノ經過ヲ取レル事アリ。又稀ニ腎臟部ノ症状全ク缺ケルモノモアリ、Klumov, Farkasノ例ノ如キ之ナリ。而シテ腎臟部ノ症状ハ總テ化膿性腎臟周圍炎ヲ思ハシムルモ「腎臓カルブンケル」デハ初期ハ餘リ著シカラズ、化膿性炎衝ガ腎臟被膜、脂肪被膜ニ及ビテ始メテ激甚トナルモノニシテ、又始メハ疼痛ヲ他ノ部ニ感ゼラレル事モ稀ナラズトサレタリ。余ノ例ニテハ腎臟部ノ浮腫性腫脹ヲ缺如シ直チニ腎臟周圍膿瘍ト診斷スルニ躊躇セリ。次ニ血液像トシテハ常ニ白血球增多症ヲ示シ發熱輕微ニシテ、慢性ノ症状ヲ呈セル場合ニテモ屢々コレガ證明サル。又左方推移ヲ唱ヘル學者アリ(Köhler)。排尿困難症ハ「純腎臓カルブンケル」デハコレヲ缺クモ二次的ニ腎盂炎或ハ腎盂腎臟炎ヲ起スナラバ訴フルニ到ルベシ。尿所見ニ關シテハ一般ニ酸性ニシテ其ノ他ノ變化著シカラズ、時ニ全然無キ事サヘアリ、Lazarus等ハコレヲ以テ本症ノ特徴トセリ。サレ

ド Smirnow 等ハ如何ナル初期ニ於テモ尿中ニ白血球ヲ多少ハ證シ得ルモノナリト謂ヘリ。余ノ例ニテハ蛋白ヲ證明シ僅少ノ白血球ヲ認メタリ。要スルニ 般的ニハ一種ノ泌尿器疾患ナルニ不拘尿所見ハ輕微ナルモノノ如ク、少數ノ血球又ハ微量ノ蛋白ヲ證シ得ル程度ノ變化ニシテ、時ニ葡萄狀球菌、圓錐ヲ認ムル事アリトナス。腎臟機能ハ病竈ノ進行程度ニヨリ差異アルモ、大多數ハ健側ニ比シテ低下セルモノニシテ稀ニハ非常ニ低下セル例モ文獻ニ記載サレタリ(Horn, Köhler)。Barthハ患側腎尿ノ結氷點降下度ノ減退及ビ「フロリヂン」反應ノ遲滯ヲ認メ、Pflaumerハ「クロモチストスコビー」ニヨル機能検査ヲ推奨セリ。併シ又病竈ガ餘リ大ナラザル時ニハ初期結核腎ニ於ケルガ如ク、患側ガ反ツテ亢進セルガ如キ結果ヲ得タル例モ報告サレタリ。腎盂X線像ニ就テハ正常ナリシ結果ヲ得タル者アルモ、多クハ何等カノ變化ヲ肯定セリ。即チ腎盂ノ擴張、腎盂形狀ノ異常、腎臟實質内ノ腫瘍様ノ陰影及ビ其ノ他特異ナル陰影ヲ認メ得タリト云フ。本症ノ診斷ニ際シテハ上記ノ所見ヨリスルモ、特有ナル症状無ケレバ術前確實ナル診斷ハ非常ニ困難ナルモノニシテ多クノ場合化膿性腎臟周圍炎、腎臟周圍膿瘍、腎膿瘍、化膿性腎炎、腎臟結石等トシテ手術サレ始メテ本症ナル事ヲ發見セラルルモノナリ。Lazarusハ22例中4例ヲ術前ニ診斷シ得タリトナセルモ、確定的診斷ニ非ズ疑ヒタルニ過ギザリシナリ。腎盂X線撮影法ニヨル診斷モLjunggren, Hohlbaum, Mac Myn, Path & Reid等ハコレヲ推奨スレド、Voss, Prives, Lazarus, Thomas & Exley等ハコレニ絶對的價値ヲ置カズトナシ、特別ナル診斷法ナキ現在ニ於テハ本法ハ參考ニ應用スベキ程度ノモノナリトセリ。要スルニ症状ガ許スナラバ種々檢索スベキモ症狀進メル時又ハ疑ハシキ時ハ腎臟ノ試驗的露出ニヨリ診斷ヲ速ニ確定スベキナリ。

鑑別診断スベキモノハ主トシテ各種腎臟疾患ナリ、就中化膿性腎臟周圍炎、腎臟周圍膿瘍トノ鑑別ハ非常ニ困難ナリ、之等ハ殆ド常ニ同ジ症状ヲ呈セルモノニシテ、且又「腎臟カルブンケル」ヨリ併發サル場合モアレバナリ、其ノ他鑑別ヲ要スベキ疾患トシテハ「腸チブス」、「インフルエンザ」、肋膜炎、肺炎、蟲様突起炎、膿瘍炎、腹膜炎、子宮附屬器ノ炎症等學ゲラルベシ。

第5章 豫後竝ニ治療

豫後ハ一般腎膿瘍ニ比シ良好ニシテ、早期適當ナル療法ヲ行ヘバ殆ド全治スモノナリ、然レ共診断不明ノマメヲ放置セバ腹膜炎或ハ全身感染或ハ肺炎等ヲ併發シテ不幸ナル轉歸ヲ取ル場合モ無キニシモ非ズ、Barth, Neff, Kretchmer, Res-

chke, Rjasanzewa, Horn, Lipschutz, 神部氏等ノ死亡例モ報告サレタリ。

治療トシテハ外科の手術アルノミニシテ、從來腎切開、膿瘍剔抉、腎切除、腎被膜剝離、腎剔出等ノ手術行ハレタリ、Barth 等ハ腎剔出術ヲ推奨シ之ヲ最モ確實ナリトスルモ、Jordan, Köhler 等ハ腎切開ヲ行ヒ、Neff ハ膿瘍剔抉ニ成功セリ、病竈進行セル場合或ハ敗血症等ヲ合併セル場合ニハ勿論腎剔出ヲ決行スベキモ、病竈小ニシテ限局セルガ如キ場合ニハ出來ル丈機能力アル腎組織ヲ保持センガ爲ニ保存的の手術ニヨリ治セシムベキナリ、余ノ例デハ單ナル腎切開及ビ葡萄球菌「アンチウイルス」注入ニテ良果ヲ收メ得タルモノナリ、終リニ本邦ニ於テハ僅カ數例ヲ算スルニ過ギザレド試ミニ一括シテ表示スルバ次ノ如シ。

報告者	年齢	性別	左右別	手術	轉歸
菊地	28 j	♀	左	腎剔出	全治
大塚	20 j	♂	右	同上	同上
金子	20 j	♂	左	同上	同上
神部	44 j	♂	兩側	左腎剔出	死 <small>合併(肺膿瘍 膿瘍)</small>
井上	26 j	♂	右	腎剔出	全治
北川	20 j	♂	左	同上	同上
安原	22 j	♂	右	腎切開	全治

第6章 總括

- (1) 余ハ22歳ノ男子ニ於テ右腎臟周圍炎ノ疑ノ下ニ試験的腎臟露出術ヲ行ヒシニ、「腎臟カルブンケル」ノ1例ヲ經驗セリ。
- (2) 患者ハ左拇趾ノ疣贅切除後化膿シ次デ左腓骨骨髓炎ニ罹リシモノニシテ之ガ原發竈ナリト思惟サル。
- (3) 症状ハ發熱、白血球增多症、腎臟部ノ自發痛乃至壓痛、尿ノ輕度ノ變化ヲ認メシノ

ミナリ。

- (4) 試験的露出腎ニ於テハ腎下極ニ限局セル小膿瘍集團ヲナセル病竈部アリ、病原菌トシテ黄色葡萄球菌ヲ確認セリ。
- (5) 治療トシテ腎切開ナル可及的保存的の手術ニヨリ幸ニ良果ヲ收メ得タリ。

撰筆スルニ當リ恩師津田教授ノ御懇篤ナル御指導ト御校閲トヲ深謝ス。

主要文献

- 1) *A. v. Lichtenberg*, Handbuch der Urologie, III. 2) *Auton, Lieben*, Ztschr. f. urol. Chirurgie, Bd. 9, 1922. 3) *Aschner, P. W.*, Amer. Journ. Surg., Vol. 1, 1926. 4) *A. Busells*, Akute Infektionen, 1926. 5) *Barth*, Arch. f. klin. Chirurg, Bd. 2, 1926. 6) *Beer*, Journ. urol., Vol. 27, 1932. 7) *Dick*, Brit. Journ. Surg., Vol. 16, 1928—1929. 8) *F. Necker*, Ztsch. f. urol. Chirurg, Bd. 8, 1922. 9) *Horn*, Ztsch. f. urol. Chirurg, Bd. 14, 1924. 10) *Hegedus*, Ztsch. f. urol. Chirurg, Bd. 23, 1927. 11) 井上, グレンツゲビート, 第6巻, 昭和10年. 12) *J. Israel*, Chirurg, Klinik d. Nierenkhten, 1901. 13) *J. Israel u. W. Israel*, Chirurg, d. Niere u. d. Harnleiters, 1925. 14) *Jordan*, Chirurg, Kongress, 1899. 15) *Köhler*, Ztrbl. Chirurg, Bd. 56, 1929. 16) *Kretschmer*, Journ. Surg., Vol. 8, 1922. 17) 菊地, 川野, グレンツゲビート, 第6巻, 昭和7年. 18) 金子, 渡利, 日本泌尿器科学會雑誌, 第20巻, 第10號. 19) 神部, 境野, 長崎醫學會誌, 第12巻, 第11號. 20) 北川, 臨牀ノ日本, 第3巻, 第12號, 昭和10年. 21) *Lichtenstern*, Ztsch. f. urol. Chirurg, Bd. 16, 1924. 22) *Ljunggren*, Ztsch. f. urol. Chirurg, Bd. 31, 1931. 23) *Lazarus*, Journ. urol., Vol. 21, 1929. 24) *Lipschutz*, Ann. Sur., Vol. 93, 1931. 25) *M. Jaffé*, Mitteilgen aus den Grenzgebieten d. Medizin u. Chirurgie, Bd. 9, 1902. 26) *Mathe*, Ref. Ztschr, urol. Chirurg, Bd. 18, 1925. 27) *Moore*, Journ. Amer. Med. Assoc., Vol. 96, 1931. 28) *Neff*, Ann. Surg., Vol. 93, 1931. 29) *Nicolich*, Ztsch. f. urol., XXI, 1927. 30) 大塚, 高橋, 皮膚泌尿器科雑誌, 第33巻, 第3號. 31) *Paul Frangenheim u. E. Wehner*, Chirurgie, VI. 32) *Prives*, Ztsch. urol. Chirurg, Bd. 30, 1930. 33) *Peterson*, Ztsch. f. urol. Chirurg, Bd. 30, 1930. 34) *Rjasanzewa*, Ztsch. f. urol. Chirurg, Bd. 17, 1925. 35) *Reschke*, Arch. f. klin. Chirurg, Bd. 129, 1924. 36) *Smirnow*, Ztsch. urol. Chirurg, Bd. 20, 1926. 37) *Smirnow*, Ztsch. f. urol. Chirurg, Bd. 23, 1927. 38) *Seifert*, Münch. med. Wochenschr., 1929. 39) *Thomas*, Ref. urol. Res., XXXIV, 1930. 40) *Voss*, Ztsch. f. urol., Bd. 21, 1926.